

実際の回数は $Y+\Delta$ である。 Δ は計算的には残差とよぶものであるが、気象的には重大な意味をもつ。 Δ は計算式で表わされる地形効果以外の効果であって、個々の降雨の例ではレーダーエコーに見られる雨雲の濃度とよく対応している。この場合は積乱雲等の強い雨雲の発生しやすい地帯を示すものと思われる。

第4表は各観測点の Δ を示すもので、これは決して不規則な分布でないので、 Δ の分布図を作るときは従来の雨量分布図を作るときのように内そう法によればよい。かくて $Y+\Delta$ の分布は全く客観的に作られるもので、観測点では観測値と一致し観測点以外でも、根拠十分な推定値となり得る。

第4図は $Y_1+\Delta$ の分布であって、格子間隔は4kmにとつてある。第4図-6は $\sum(Y_1+\Delta)$ の分布であって、第3表の20年間の豪雨回数に相当し、地形を加味

した分布図である。これによって、観測のない地域の推定値を求めることが出来る。

5. ま と め

豪雨の原因を海上からの湿潤気団の流入と地形による強制上昇とにありとして、豪雨出現回数の計算値を求め、その分布図を作った。これにより観測のない地域の値も地形により定まる。ただし地形効果以外の残差は実測値との差より求め、この各観測点間の値は距離に対し1次的に変化するものと見た。

謝 辞

この研究をするに当って、小笠原和夫博士よりは多大のご指導を受けた。また、資料を集めるときは、気象庁統計課、東京管区気象台調査課よりは大きな便宜を与えられ、奈良、和歌山並に津地方気象台、尾鷲潮岬測候所より重要な資料のご提供を受けた。厚くお礼申上げる。

“天気” の内容についてのアンケートの回収にご協力下さい

現在“天気”の内容についてのアンケートを実施しておりますが、これは今後の“天気”の編集方針を決める上で、また内容の充実・改善をめざす具体案を作る上で、各員各位が何を“天気”に望んでおられるかを適確に把握し、これを編集に反映させるためです。

実施要領および回答用ハガキは5月号に掲載してありますので、それをご覧下さい。

現在すでに回答が寄せられつつあります。その中で「どうも回答しにくい」という声をいくつか耳にしましたが、できるだけ多くの会員の意見を聞くことが目的の一つですので、気軽に答えられる範囲で回答下さい。

回答には会員の種別と職種だけで、記名の必要はありません。締切は7月末日です。

なお、近くに天気編集委員または地区編集委員がおられる場合には、その方に渡していただいても結構です。

(天気編集委員会)